中日新聞（2022年8月30日付）
掲載記事は中日新聞社の許諾を得て転載しています。

障害のある子たち 粘土遊びを楽しむ

千種の児童発達支援施設

千種区猫洞通の児童発達支援施設「市東部地域療育センターぽけっと」で二十五日、二～五歳の子どもたち十三人が粘土遊びを楽しんだ＝写真。

センターには千種、守山、名東の三区で暮らす障害のある未就学児が通う。粘土遊びは、子どもたちに健常者と変わらない経験をしてもらいたいとの方針で企画した。日本福祉大教育・心理学部教授で陶芸家の江村和彦さん（五三）と保育士などを目指す学生六人が訪れ、職員らと一緒になって子どもたちと過ごした。

室内に敷いたブルーシートの上に、きめの細かい粉の粘土を水で溶いて広げ、「どろどろ池」に。子どもたちは、職員らに体を支えてもらいながら、脇に置いた滑り台から降りたり、腹ばいになったりした。

江村さんは「粘土で思い切り遊ぶことは、子どもたちの心を落ち着かせる効果もあるようです」と説明。参加学生の一人で来春、障害者施設に就職が決まっている南区の村上流風（るか）さん（二二）は「重い障害の子たちは、楽しくても笑ったりできない。ささいな表情の変化も読み取って接することが大切だと痛感し、勉強になった」と話した。

（許諾番号:20220905-28238）